

2021 年度卒業論文(王ゼミ)

「同担拒否」が起こる原因の再考

—TWICE ファンの事例から—

琉球大学 国際地域創造学部 経営プログラム

187450B

仲尾次 梨乃

目次

第1章 序論

1.1 本研究の背景

第2章 調査の準備

2.1 調査に関連する用語の定義

2.2 調査概要

2.3 調査結果

第3章 内的要因

3.1 問題提起

3.2 結果・考察

第4章 外的要因

4.1 問題提起

4.2 SNSの普及

4.3 接触や交流機会の増加

第5章 まとめ

5.1 結論

5.2 課題

参考文献

「同担拒否¹」が起こる原因の再考

—TWICE ファンの事例から—

187450B 仲尾次 梨乃

近年、アイドルやアニメなどのサブカルチャー愛好家の中で「同担拒否」という現象が多くみられる。アイドルファンの中で「同担拒否」が起こる原因についてさまざまな先行研究がされてきた。ファンの性格や心情などの内的要因については明かされていたものの、それ以外の原因に関する言及はあまり見られなかった。本論文では独自に設計した質問票調査を通じて、内的要因以外の原因を探索的に調査した。その結果、「SNS の普及」、「アイドルとの接触や交流する機会」などの外的要因も「同担拒否」に影響していることが分かった。さらに、内的要因と外的要因はそれぞれ独立したものではなく、外的要因が発生したことにより、ファンがもともと持っていた内的要因が誘発され「同担拒否」が起こると考える。

キーワード：アイドル、ファン、同担拒否、握手会、イベント

第1章 序論

1.1 本研究の背景

アイドルファンの中で起こる「同担拒否」現象について、先行研究ではさまざまな理由をあげているが、どれもアイドルファン側に原因があるとされている。徳田は「同担拒否」しているアイドルファンがアイドルとの疑似恋愛関係を求めているとして、現実で好きな人が被る場合のライバル意識や、恋人をほかの人にとられたいくないといったような嫉妬心から「同担拒否」が起こるとした²。これに対して、辻によれば、「同担拒否」が起こるのは、ファンがアイドルに対して疑似恋愛関係を求めるのではなく、ファン同士の衝突を避け、ファン活動が円滑に行えるようにするために自らの行動を抑制した結果であるとした³。さらに立教大学・中村ゼミのアイドルファンと乙女心に関する研究では、「同担拒否」が女性特有のものであるとしながら、恋愛映画・漫画、ピンク色や可愛らしいものが好きといった女性のアイドルファンの「乙女心」から発生する「現実味のない空想」と関係すると主張した⁴。

上記レビューしたように、「同担拒否」が起こる原因は、「疑似恋愛関係（徳田 2010）」、「衝突回避（辻 2012）」と「女性特有の嫉妬心や独占欲（立教大学・中村ゼミのアイドル

ファンと乙女心に関する研究 2018)」などが考えられる。特に、先行研究であげられたこれらの原因はどれもアイドルファンの感情や心理に深く影響されており、この条件を満たせば「同担拒否」におこりやすいと考えられている。

この点についてももう少し検討を付け加える必要がある。辻（2018）によれば、「同担拒否」という言葉が誕生し定着したのは 1990 年代のことである⁵。一方、小林（2005）によれば、日本においてアイドルが誕生しブームになったのは 1970 年代頃であり、その時にも「親衛隊」と呼ばれる熱狂的なアイドルファンが存在していた⁶。親衛隊同士に「同担拒否」が起こるところか、むしろファン同士がともに共通のアイドルの応援活動や身辺警護などを行っていた。しかし、これらの親衛隊と呼ばれる熱狂的なファンの中にもアイドルと同性のファンがいるはずである。もし前述したような「同担拒否」の原因正しければ、70 年代にも「同担拒否」が起こってもおかしくないはずである。それにもかかわらず、この 20 年ほどの間に「同担拒否」は全然起こらなかった。もちろん、70 年代では「同担拒否」という言葉は存在していないが、それに類似する言葉も誕生していなかった。この点からみて、もしかすると「同担拒否」はファンの内的要因だけではなく、まだ明らかにされていない、時代変化のなかで派生的に生まれた外的要因があるのではないかと考える次第である。この問題意識に基づいて、本論文は「同担拒否」に影響する外的要因の有無を確認し、もし存在するのであればそれは何かを明らかにする。これが本論文の目的である。この目的を達成するために、本論文では次の構成で展開していく。まずは、「同担拒否」に関する定義を整理する。それからアイドルグループを選定し、そのグループを支持するファンの特徴を整理した上、先行研究から得た知見を検証し、そこから疑問点をあぶり出す。更に、疑問点に答えるために独自の調査を通じて妥当な説明を見出していく。

第 2 章 調査の準備

2.1 調査に関連する用語の定義

「担当」とはジャニーズファンの中で使われていた自分の好きなアイドルを指す言葉であるが、現在はジャニーズファンだけでなく他のアイドルグループのファンやアニメファンなどある趣味を持つファンの間で広く使われている。また同じアイドルを応援しているファンを「同担」と呼び、そのファンに対し極力遠ざける行動をとるなど文字通り拒否行動をとることを「同担拒否」と呼ぶ。これはファン活動を行う上で「同担の人とは交流したくない」という意思表示であり、実生活や SNS でのファン同士の交流の際に使用されている。「同担拒否」はあくまでファン活動内での拒否行動や意思表示を示す言葉であり、同担を拒否するあまりそのアイドルのイベントに行かなくなったり、応援自体をやめるこ

とではない。同担の対義語に「他担」があり、これはアイドルグループ内で自分とは違うアイドルのことを応援しているファンのことを指し、「同担拒否」をしているファンは同担との交流を避けるためファン同士の交流を一切行わないよりも、この他担と交流することが多い。

2.2 調査概要

「TWICE」は 2015 年に結成された韓国の 9 人組女性アイドルグループであり、日本でもデビューしているため日本人のファンも多い。ライブやファンミーティング、ハイタッチ会やサイン会などさまざまなイベントを行っている。日本では主に 10 代から 20 代の若者が中心のファンダムであり、その多くを女性が占めてて、本論文では質問票調査を行った 269 人のうち 6 割が 10 代、3 割が 20 代で占めており、全体の約 9 割が女性であった。

調査は 2021 年 11 月 20 日から 27 日までの一週間、SNS を利用し行った。調査項目はまず回答者自身に関することやファン活動に関することがある。

質問票調査項目 1

回答者の年齢
回答者の性別
対象グループ以外に応援しているアイドルがいるか
応援方法
CD にイベント応募券が付いてくることに賛成か
CD 購入金額の多い順にイベントに参加できる制度に賛成か
年収(お小遣いも含む)に占めるファン活動の金額の割合
アイドルに対する感情
「同担拒否」の有無
なぜ「同担拒否」をするのか(「同担拒否」していると答えたひとのみ)
過去に好きだったアイドルに対する「同担拒否」の有無

次に回答者の趣味嗜好や性格に関する項目について五段階での回答を求めた。

質問票調査項目 2

嫉妬深い方か
独占欲がある方か
不安になりやすい方か
恋愛映画や恋愛ドラマが好きか
気に入った小説や映画の世界に入り込んで空想を巡らせている時があるか

2.3 調査結果

「同担拒否」しているファンの特徴

「同担拒否」しているファンはそのアイドル一人に対し熱狂的な応援をしていると予想していたが、「同担拒否」しているファンの約9割が他に応援しているアイドルがいると回答した。これは「同担拒否」していないファンと比較しても高い割合を占めている。しかし収入に対しアイドルに使っている金額の割合が5割を超えている人が全体だと25%程度なのに対し、「同担拒否」しているファンは44%程度でより多くのお金を使おうとしていることが分かる。さらにライブやコンサートに参加する割合も「同担拒否」していないファンが6割を切る中、「同担拒否」しているファンは7割と高くなっている。いわゆる現場系と呼ばれる実際にアイドルに会いに行くファンが多いのも特徴である。

調査結果

	「同担拒否」している	「同担拒否」していない
対象アイドル以外に応援しているアイドルがいる	98%	92%
収入の5割以上がファン活動で占めている	44%	26%
ライブやコンサートに参加する	69%	57%

さらに「同担拒否」をしていると回答したファンに対し、なぜ「同担拒否」をしているのかといくつか選択肢を挙げ回答してもらったところ、一番多かったのは34.8%で自分と同担でアイドルの魅力など解釈や価値観が違うことであった。次に26.1%で実生活で好きな人が被った時と同じライバル意識で、その次に17.4%で同担よりも自分の方がそのアイドルのことが好きで詳しいからという理由だった。これは先ほど述べた「同担拒否」しているファンに特徴であるライブやイベントに参加している割合が高いことと、使う金額の割合が高いことにも関係しているといえる。

なぜ「同担拒否」をするのか自分と同担でアイドルの魅力などで解釈や価値観が違うから	34.8%
実生活で好きな人が被った時と同じライバル意識	26.1%
同担よりも自分の方がそのアイドルが好きで詳しいから	17.4%
そのアイドルが自分以外のファンを見るのが嫌だから	8.7%
過去に同担とトラブルがあったり、嫌な思いをした経験があるから	4.3%

第3章 内的要因

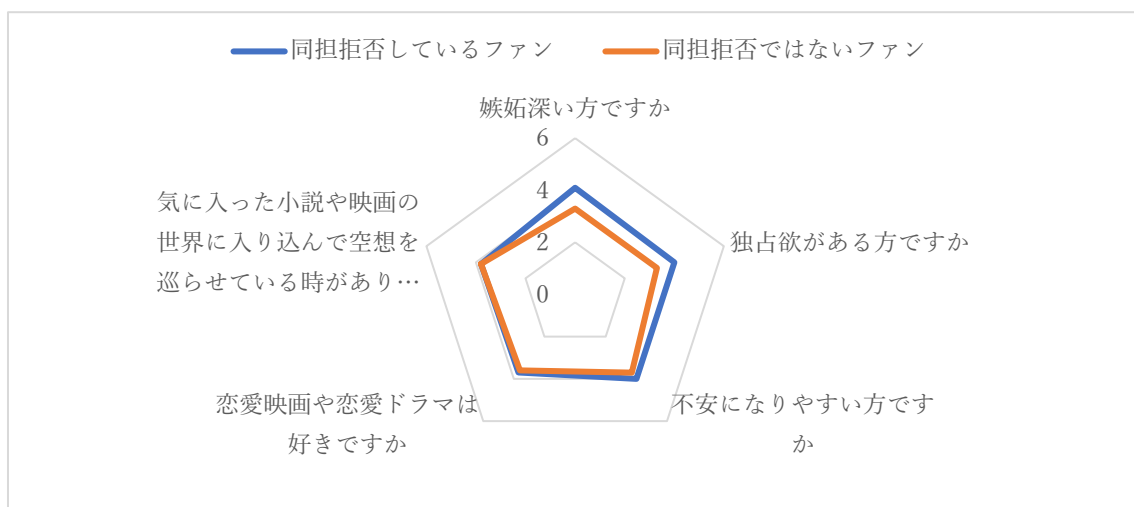
3.1 問題提起

「同担拒否」が起こる原因の一つにアイドルに対し疑似恋愛関係を求めた結果、同担に対しライバル意識や嫉妬心を持ち、同担を拒否してしまうということがあった。しかし本調査で対象となった「同担拒否」しているファンは全員女性であるため同性のアイドルを応援している。果たして同性のアイドルに対しても疑似恋愛関係を求め「同担拒否」しているのか、またこれまで研究されていたジャニーズ事務所所属のアイドルを応援する女性ファンと内的要因に差があるのか、そこを明らかにする。

3.2 結果・考察

「同担拒否」の内的要因を探るためにファンの趣味嗜好や性格について五段階での評価調査を行った。その結果、恋愛映画やドラマ、空想などの趣味嗜好について「同担拒否」をしているファンと「同担拒否」していないファンでは回答に大きな違いがみられなかった。次に性格について、先行研究でも挙げられていた嫉妬心や独占欲に関して、「同担拒否」をしていないファンの平均がどちらも 3.3 になったのに対し、「同担拒否」しているファンはどちらも平均が 4 を超える結果となった。つまり「同担拒否」はファンのアイドル以外の趣味嗜好の影響を受けないが、ファン自身の嫉妬深さや独占欲の強さなどの性格に影響されると分かった。(図1参照)

図1 ファンの内的要因に関するアンケート調査



次に疑似恋愛関係について、「同担拒否」をしている人の中で4人がアイドルに対し疑似

恋愛関係を求めているが、「同担拒否」の原因の自己認識に関する調査ではそれを超える12人が実生活で好きな人が被った時のライバル意識から「同担拒否」をしていると答えた。疑似恋愛関係を求めると嫉妬心や独占欲が生まれることは事実であるが、ライバル意識や嫉妬心は疑似恋愛関係を求めた結果だけではなくより多くの人がそのような感情を持つと分かった。

しかし内的要因を探る上で一つの疑問点が生まれた。現在と過去で「同担拒否」の有無について変化があったかという問いに対し、全体の約16%の人が変化があったと回答した。先行研究やこれまでの調査結果では内的要因が「同担拒否」を引き起こす原因とされていたが、その「同担拒否」の有無が変化するという事は、単にそのファンの性格や心情などの内的要因が変化した結果なのか。それとも内的要因だけでなく、他の要因が「同担拒否」を引き起こして、その違いによって同じ人でも「同担拒否」を起こす場合とそうでない場合があるのか。第4章では外的要因に着目して原因を探る。

第4章 外的要因

4.1 問題提起

第3章の終わりに述べたようにアイドルファンの現在と過去で「同担拒否」の有無に変化がある以上、「同担拒否」が起こる原因はファンの性格などの内的要因以外にもあるのではないかと推測できる。またアイドルが誕生してから「同担拒否」が誕生するまでには長い期間が開いている。つまりこの期間に「同担拒否」が起こるきっかけが生まれたのではないか。第4章ではその原因について時代の変化に着目してその原因を明らかにする。

4.2 SNSの普及

「同担拒否」の外的要因を探るにあたり、まず同じサブカルチャーの中でも「同担拒否」が見られない分野について調査し、その比較から外的要因を見つける。まず宝塚歌劇団のファンについて、ファンは応援しているスター(演者)のことを「御最前」と呼んでいる。この言葉は本論文で出てくる「担当」と同意義である。ファン活動は公演やイベントへの参加などアイドルグループと変わらないがなぜ「同担拒否」が生まれぬのか、それは宝塚歌劇団の歴史や独特なイベントにあった。

宝塚歌劇団は1914年に初公演を行い現在まで100年以上の歴史を持っているため新規ファンはどうしても古参ファンの知識にはかなわない。ここで古参ファンと新規ファンの間に考えや解釈の違いにより衝突が起きそうであるが、ここで注目するのが宝塚歌劇団独特のイベントである。宝塚歌劇団では劇の公演だけでなく、ファンクラブで開催される会

合やお茶会などのイベントがある。これらのイベントはイベント中の待ち時間が長く、ファンはその時間を近くのファンと交流して過ごしている。その時に古参ファンは新規ファンに自分の御鼻屑について布教活動を行うことが出来、知識を披露することで承認欲求も満たしている。これに対し新規ファンは自分じゃ知り得なかった過去の出来事について知ることが出来、お互いが得をする関係になっていると宮本(2011)は述べている⁷。このファン同士の直接交流はお互いにメリットがある上に対面でのやり取りになるので「同担拒否」が生まれにくい原因であると考えられる。

さらに対象が人ではないが鉄道ファンについても同じことが言える。鉄道ファンはその性質上実際に駅や線路に行き鉄道に乗ったり、写真を撮ったり、ファン同士が直接交流するオフラインでの活動が主流である。もちろんファンダムが誕生した後、情報交換に SNS を利用することもあったが、当時そこでは情報の正確性をあげる目的で、デマ情報を流しにくくするために実名制での情報交換が行われていたと辻(2011)は述べる⁸。顔が見えなくとも、鉄道ファンそれぞれが一個人として特定される状態で交流していたのである。

この二つに共通しているのはファンダム誕生からファン同士の交流がオフラインからオンラインの順番であった点である。オンラインではその利用者の数の多さや匿名性から自ら交流する相手を事前に選ぶことが出来る。さらに性格や価値観が合わないと思ったらすぐに距離を置くことが出来る。それに対しオフラインでは相手を目の前にするため実生活の友人関係のように、交流する前から目の前にいるある特定の人をけん制する態度を取らないうに、一度交流すると性格や価値観が合わなくても無視するなど簡単に関係を終わらせることはできないと考えられる。これがこの二つのファン・コミュニティで「同担拒否」が起こらなかった原因に強く関係していると考えられる。

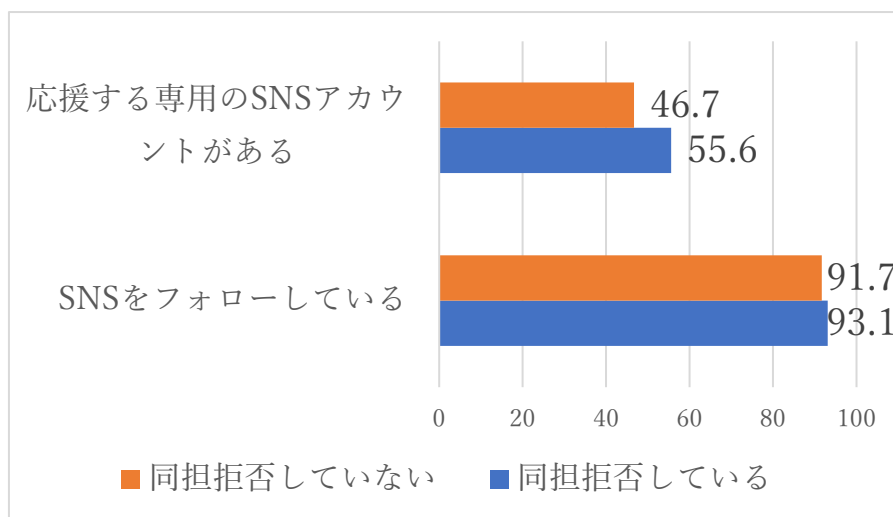
次にアイドルファンと同様に「同担拒否」が見られやすいアニメファンについてみていく。ローレンス(2014)はアメリカのアニメファンが急増した理由にインターネットや SNS の普及をあげている⁹。それまでサブカルチャーとして身近に同じアニメファンを見つけ情報や感情を共有することが出来なかったが、1990 年代にかけてインターネットや SNS が普及したことにより世界中でそれが可能となってファンが増加した。さらにアニメファンはイベント開催などがあるものの、純粋にアニメを視聴するだけのファン層が多いだろう。イベントに参加せず、視聴するだけのファン活動なら一人で行うことが出来るし、ファン同士の交流はオンラインに限られていることもある。このようなことからもともとのアニメファンももちろんいるが、急増したことを考えると前述した二つのファンダムの交流がオフラインからオンラインへの変化だったのに対し、アニメファンはオンラインからオフラインへの変化、またはオンライン上で完結していると考えられる。

現代のアイドルファンはこのアニメファンと同じ交流の形態をしていると考えられる。実際に TWICE が結成されたのはすでに SNS が普及していた 2015 年であることから TWICE のファン同士の交流はオンラインからオフラインへ変化するものが主流だと考えられる。実際に TWICE のファンに対し SNS の利用状況を調査したところ全体の 98%がファン活動

に SNS を利用していて、さらに 48% が TWICE を応援するための専用アカウントを保有していた。一般的に実生活で交流のある人と繋がるいわゆるリア垢よりも、専用アカウントを作って応援の方がそのファン・コミュニティのなかでの SNS 交流が盛んになる。さらに「同担拒否」をしているファンとしていないファンを比較してみると「同担拒否」しているファンの方が 1.4% 多く SNS を利用していて、さらに 8.9% 多く専用アカウントを保有しファン同士でさらに深い交流を行っていることが分かった。（図 2 参照）

つまり SNS の普及でファン同士がオフライン交流を行う前にオンライン交流が盛んになったことで事前に交流をしたい人を厳選することが出来、気軽に特定の相手をけん制することが出来るようになったことで、解釈や価値観の違いからトラブルになりやすい同担を拒否する人が増加したと考えられる。

図 2 TWICE ファンの SNS 利用状況



4.3 接触や交流機会の増加

次にアイドル活動の歴史について調査し、「同担拒否」の発生原因を考える。前述したように過去にも熱狂的なアイドルファンがいたことと、ファンの内的要因が「同担拒否」の原因になっていることから考えても、「同担拒否」が誕生した 1990 年代以前にも「同担拒否」という概念はあってもおかしくない。そこで「同担拒否」が誕生するきっかけがアイドル側の変化にあるのではないかと、アイドル活動に焦点を当てて調査する。

まずアイドルが誕生した 1970 年代当初、アイドルが行う活動といえばテレビ番組などメディアの出演やコンサートやライブの開催、レコード店でのリリースイベントなどが主であった。2000 年代に入るとこれらの活動に加え握手会などのアイドルとファンが個別に関わることが出来るイベントや SNS の利用、動画配信など各アイドルグループがさまざまな活動を行ってきた。SNS 利用や動画配信などはそれぞれファンクラブの会報やテレビ番組

の出演の代替であるが、ここで大きな違いとなるのがアイドルとファンが個別に関わる事が出来るイベントである。握手会やハイタッチ会などといったアイドルとファンが一对一で交流できる機会が2000年代頃に急増したのである。もともとアイドルが誕生した当初から握手会は存在していたが、CD を発売したときにレコード店を回り、そのついでに行われた程度で、ここまで爆発的に増えたきっかけとなったのが AKB48 が CD に握手会の参加券を封入し販売を始めたこと(大友 2019)¹⁰で、その後ハロープロジェクトやジャニーズ事務所に所属しているなど、男女問わずさまざまなアイドルグループに浸透した。

本調査で対象としているアイドルグループ「TWICE」に関しても、ハイタッチ会やサイン会などアイドルとファンが一对一で会話し触れ合えるようなイベントが行われている。このイベントの参加システムは主に二つあり、一つ目は TWICE の CD にランダムに封入されているイベント参加券を手に入れるか、封入されているイベントへの参加抽選券を手に入れ応募し、当選した場合そのイベントに参加できる。二つ目は指定された CD ショップにてその CD の合計購入金額が多い順にイベントに参加できる方法である。前者は完全ランダムであるため平等性があるのに対し、後者は単に多くの CD を購入した人が当選するシステムになっている。このイベント参加券の封入された CD の販売が「同担拒否」の原因になっているのではないかと考え、その意識調査と行動調査を行った。

まず CD にイベント参加抽選券を封入に販売していることに賛成か反対か、また CD の購入金額が多い順にイベントに参加できる制度について賛成か反対かについて意識調査を行ったところ、「同担拒否」しているファンとしていないファンの間でその意識に大きな違いが見られなかった。むしろ CD にイベント参加抽選券を封入して販売していることについては「同担拒否」しているファンの方が4.7%も多く反対していた。(図3参照)似たようなイベントへの意識調査だが、そのシステムの違いから若年層が多い TWICE ファンでは購入金額によって参加者が決まるイベントに関して反対が多くなった。

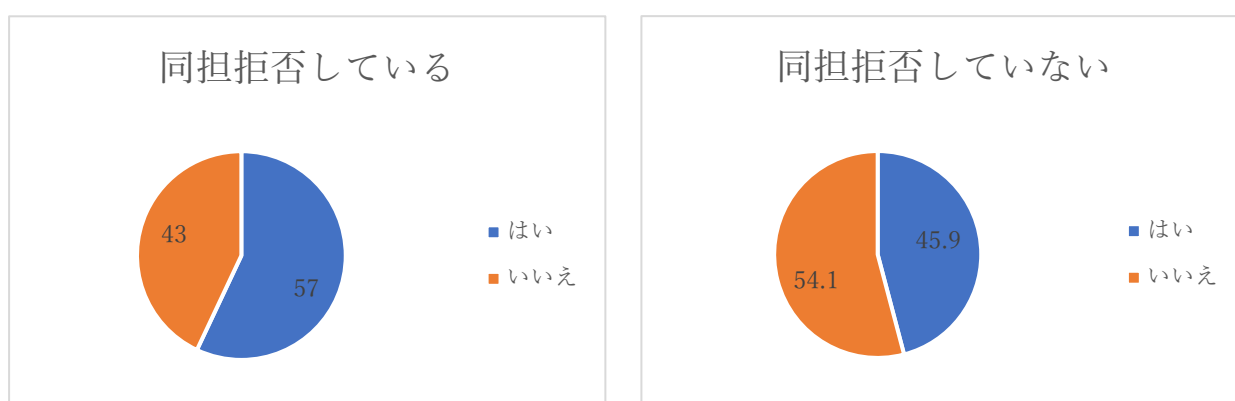
図3 CD にイベント参加抽選券が封入されていることに賛成か反対か



この結果について、調査を行う前の予想では「同担拒否」しているファンの方が同担がない状態のアイドルとの一对一での交流を望んでいるため、賛成が多くなると考えてい

た。しかし結果はそうならなかった。では握手会やハイタッチ会などのアイドルとの一対一での交流は「同担拒否」に影響を与えていないのか。そこで実際にハイタッチ会やサイン会に参加したことがあるかという調査を行った。すると実際には「同担拒否」をしているファンが 57%が参加経験があり、「同担拒否」をしていないファンが 45.9%しか参加経験がないという結果になり、「同担拒否」をしているファンの方が意識調査で反対と回答する割合が高いが、それでもハイタッチ会やサイン会に参加する人が多いと分かった。（図 4 参照）

図 4 ハイタッチ会やサイン会などの個別イベントに参加するか



ハイタッチ会はアイドルとファンの一対一での交流のため、アイドルグループのメンバーごとにファンが列を作り、順にハイタッチを行うというシステムになっている。つまり自分が好きなアイドルとハイタッチをしようと思うと同担との接触や交流が避けられない。SNS とは違い事前に周りにいる同担に対し自分が「同担拒否」であることの意味表示を行うことが出来ないため、周りにいる同担の会話が耳に入り、「同担拒否」の原因の自己認識で一番挙げられていた解釈や価値観の違いなどの原因が引き起こさされてしまうと考えられる。このようなオフラインでの接触や交流の機会が増えたことが「同担拒否」の発生に影響を与えたと考える。

第 5 章 まとめ

5.1 結論

「同担拒否」が起こる原因として先行研究で挙げられていたファンの性格や心情などの内的要因は同性アイドルを応援しているファンの「同担拒否」にも当てはまり、「同担拒否」しているファンの方がしていないファンよりも嫉妬深く、独占欲が強いことが分かった。このような嫉妬心や独占欲は単に疑似恋愛関係を求めた結果ではなく、アイドルの活

動が広がり、より身近に感じる事が出来るようになったことも影響している。しかし現在と過去で「同担拒否」の有無に変化がみられる人がいることが判明したため、内的要因だけが「同担拒否」の原因ではないと仮説を立て、外的要因を調査した。

まずアイドル誕生した時期と「同担拒否」が誕生した時期が違うことに気づき、時代の変化によって生まれた外的要因を調査した。すると SNS の普及によりファン同士のオフライン交流の前にオンライン交流が盛んになっていることが分かり、さらに握手会などの個別イベントの誕生によりオフラインでの接触や交流の機会が増加したことが分かった。あらかじめ意思表示をして交流する人を選択することが出来るオンライン交流を主にしていたファンがオンラインでファン同士の接触や交流の機会が増加することで、これまで出来ていたこれらのファン活動が出来なくなることで価値観の違いなどによりファン同士の衝突が起こり「同担拒否」をしてしまうと考える。よってこれらの内的要因と外的要因が「同担拒否」の起こる原因であるといえる。

しかしこれらは別々に存在しているわけではなく相互に関わりあっていると考える。どれかが当てはまれば「同担拒否」が起きるというわけではない。つまり SNS の普及によるオンライン・オフライン交流の順番の変化や握手会やハイタッチ会での接触や交流の機会が増えたという外的要因の発生により、嫉妬心や独占欲などファンの性格やライバル意識といった心情などのファンがもともと持っている内的要因が誘発され「同担拒否」が起こると考える。

5.2 課題

この研究を終えて明らかにすることが出来なかった課題もある。先行研究も本研究も「同担拒否」をしているアイドルファンは女性であった。先ほど述べた結果だと、嫉妬深く独占欲が強いという内的要因を持つ人が一般的に女性の方が多いとしても、男性でも「同担拒否」が起こる可能性があると考えられる。しかしそれぞれのアイドルファンに対する男性の割合が少ないとはいえ、「同担拒否」の男性を見つけることが出来なかった。実生活での恋愛について男性でも嫉妬したり独占欲があったりするのに、なぜアイドルに対してはそれが見られず「同担拒否」が起きないのか。それとも調査対象が女性の方が割合が高いためこのような結果になったのか。これは男性ファンが多いアイドルグループに対して調査を行うことで原因を調査できると考える。

また「同担拒否」しているファンに聞いた「同担拒否」の原因の自己認識について、アイドルの魅力などの解釈や価値観の違いが一番多く挙げられたが、内的要因で挙げられた嫉妬心や独占欲はこの解釈や価値観の違いには当てはまらない。ではなぜ多くの方が解釈や価値観が違っていると「同担拒否」を起こしてしまうのか。またその解釈や価値観があれば同担であっても交流することが出来るのか。個人によって差があるものの、「同担拒否」はどの程度まで交流を制限したいのかが分かればその原因が分かると考える。

「同担拒否」をしているファンはそうでないファンと比較してファン活動で多くのイベントに参加し、多くのお金を使っている。そのため前述した二つの未解決課題を研究して、性別や年齢を問わず「同担拒否」が起こる原因やその傾向が分かれば、意図的に「同担拒否」をするファンを増やすようなプロモーションを行い、CD やグッズの売上を増加させることが可能になる。ジャニーズ事務所所属のアイドルが男性アイドルの中でも一つ抜けて人気があるのは「同担拒否」しているファンが多いからであると考えられる。そのため「同担拒否」をするファンを増やすこともアイドルを人気にする一つの要因になるのではないだろうか。

参考文献

- 大友陽平 (2019)、「AKB ブレークのきっかけ「全国握手会」誕生に迫る」、日刊スポーツ。
- 河原実咲 宮中彩花 竹内彩夏 (2018)、「～アイドルファンと乙女心に関する研究～」、立教大学 中村ゼミ。
- 小林孝嗣 (2005)、「オタクの市場研究」、野村総合研究所 オタク市場予測チーム。
- 辻泉 (2011)、「オンライン・ファンコミュニティの実態に関する研究：鉄道フォーラム・ウェブ・アンケート調査の結果から」、松山大学総合研究所所報第 68 号。
- (2012)、『「観察化するファン」ー流動化社会への適応形態としてー』、公共財団法人吉田秀雄記念事業財団 40 号。
- (2018)、『「同担拒否」再考：アイドルとファンの関係、ファン・コミュニティ』、新社会学研究。
- 徳田真帆 (2010)、「ジャニーズファンの思考」、くにたち人類学研究 5
- 宮本直美 (2011)、「宝塚ファンの社会学」、青弓社。
- ローレンス・エング (2014)、「ネットワーク文化としてのファンダム・イン・アメリカ」、『オタク的想像力のリミット<歴史・空間・交流>から問う』、筑摩書房

¹ 徳田真帆 (2010)によれば「同担拒否」とは同じアイドルを応援しているファンと距離を置く、親密な関係になれないという現象である。

² 徳田真帆 (2010)、「ジャニーズファンの思考」、くにたち人類学研究 5、pp. 21-46。
<https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/hermes/ir/re/18563/kunitachi0000500210.pdf>
(2021 年 12 月 21 日閲覧)。

³ 辻泉 (2012)、『「観察化するファン」ー流動化社会への適応形態としてー』、公共財団法人吉田秀雄記念事業財団 40 号、pp. 28-33。

- ⁴ 河原実咲 宮中彩花 竹内彩夏 (2018)、「～アイドルファンと乙女心に関する研究～」、立教大学 中村ゼミ。
- ⁵ 辻泉 (2018)、『「同担拒否」再考：アイドルとファンの関係、ファン・コミュニティ』、新社会学研究、pp. 34-49。
- ⁶ 小林孝嗣 (2005)、「オタクの市場研究」、野村総合研究所 オタク市場予測チーム、pp. 87-102。
- ⁷ 宮本直美 (2011)、「宝塚ファンの社会学」、青弓社。
- ⁸ 辻泉 (2011)、「オンライン・ファンコミュニティの実態に関する研究：鉄道フォーラム・ウェブ・アンケート調査の結果から」、松山大学総合研究所所報第 68 号。
- ⁹ ローレンス・エング (2014)、「ネットワーク文化としてのファンダム・イン・アメリカ」、筑摩書房 オタク的想像力のリミット<歴史・空間・交流>から問う、pp. 255-286。
- ¹⁰ 大友陽平 (2019)、「AKB ブレークのきっかけ「全国握手会」誕生に迫る」、日刊スポーツ。
<https://www.nikkansports.com/entertainment/akb48/news/201903190000833.html>
(2021 年 12 月 21 日閲覧)。